2020 年　4 月　13 日

2019 年度　総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する（ ）に○を付ける	・共同研究（○）　　・個人研究（　）	
研究代表者 （所属・職・氏名）	家政学部・教授・丸田直美	
研究課題名	原のぶ子の作品に関する調査研究	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
宮武　恵子 瀬戸　瑠美	家政学部被服学科教授 家政学部被服学科助手	デザイン関連の資料の調査研究 作品、パターン関連資料のデータブック作成、整理
研究期間	2019 年 4 月 1 日　～　2020 年 3 月 31 日	

研究実績の概要（1）

１．研究目的

原のぶ子氏（1901-1997）は日本で初めてフランス式の洋裁に「立体裁断」という名を創造した人物といわれている。文献によると、共立女子職業学校の出身（1925 年卒業）で、同校卒業後とパリ留学から帰国後に本学で教鞭をとっており、本学主催の作品展も開催している。また、パリ留学から帰国後はアトリエや洋裁学校を開設し、日本の洋裁教育や服飾業界に大きな影響を与えたとしている。しかしその業績や作品についてはほとんど知られていない。2017 年度に同氏に関する資料（作品や記録等）の寄贈を受けた。そこで本研究では、同氏の残された作品や記録類を整理保存するとともに、同氏について調査研究を行うことを目的とする。

２．研究方法

1）資料（寄贈品）の確認と整理

寄贈品は本人制作の作品（衣服類）、試作品（シーチング作品）、パターン（実物大の型紙）、アンダーウエア（ボディメーキング用）、生地、著書、授業資料、教科書、ノート、デザイナーズクラブ（ファッションショー）関連資料、デザイン画、パスポート、立体裁断用ボディ、新聞記事、賞状等多岐にわたる。これらを衣服設計関連の造形分野（研究代表者）とファッション関連のデザイン分野（研究分担者）、その他に分類する。次に造形、デザインの両方に関係のある実物作品については、状態のよいものを選んでアイロン等で整え保存を行うとともに写真撮影を行い、デジタル化する。デザイン画については作品の年代順等に分類して、分析しやすいように整理する。

研究実績の概要（２）
2）原のぶ子氏について及びその作品傾向についての分析 原氏の生涯について文献をもとに調査し、作品との関連性を考察する。また、実物作品とデザイン画資料よりデザイン傾向や変化等を考察する。 ３．結果及び考察 寄贈資料は 2017 年以来、本学八王子校舎に保存保管されていたので、まずは研究資料として有用なものかどうかの確認・分類作業から開始した。数回に分けて神田校舎へ移動させ、保管に向けての作業を行った。 実物作品はアイロンがけ等形状を整えた後ボディに着装させて写真撮影を行い、ハンガーに吊るしてクローゼットで保管することとした。申請当初は保管用中性紙保存箱での保存を考えていたが、洋服であることよりハンガーでの保存とした。デザイン画関連の資料については年代、作品別シーズン（春夏・秋冬）別に分類しクリアブックを用いて整理した。資料が膨大で、パターン等に関してはまだ整理が完了していないが、スキャナを用いてデジタル化を行い、データとして保存する予定である。 原氏は 1901 年に山形県で生まれ、1925 年共立女子職業学校を卒業している。その後 1934 年にフランスに渡り、パリで洋裁の技術を学び 1939 年帰国している。 これまでに確認した資料より原氏がフランスに渡って本場の洋裁技術を学んで帰国した後の仕事のなかで主なものとしては、①自身の洋裁アカデミーの経営と教育、②共立女子大学をはじめとする大学教育と服飾文化の啓蒙活動、③デザイナーズクラブ「サロン･デ･モード」を主宰しての作品制作とファッションショー、が挙げられるのではないだろうか。この 3 つの主軸たる仕事をライフワークとして行いながら、そこから広がった多くの関係者との仕事を行っていたと考えられる。戦後はまだ洋服が日常服として普及していない時代である。洋服を着装したいと思っても、現在のようにお店で売っているわけではない。着たいと思うと自分で作らなければいけないがその作り方がわからないという社会である。その中にあって、日本人に洋服の作り方、人間の身体、ファッションの楽しみ方を伝えたと考えられる。洋服ファッションを広め、日本の服飾界の発展に貢献した人物といってもよいかもしれない。 実物作品を整理していて、和服地を用いた作品が多いことに気がついた。西欧の洋服をそのまま日本で制作しても着装場面等異なるうえに、現代ほど様々な生地が存在している時代ではない。そこで、日本の伝統を大切にしながら、日本のものを洋服に置き換えることを考え、日本人に適した洋服づくりを目指したのではないかと考えられた。 これまでに整理されたデザイン画は 1965 年から 1989 年までのものでクリアブック 35 冊（複数年欠落）になり、総作品数は 2725 作品にのぼった。この中から原氏の作品について分析を行った結果、原氏の作品は 96 作品であることがわかった。原氏が発表したアイテムは、コート、ワンピース、スーツ等の重衣料が主で、ワンピースが圧倒的に多い。ワンピースは女性の装いに華を添えるアイテムとされ、作品が発表された時代においては、多くのデザイナーが提案している。時代を牽引してきた原氏が提案するアイテムとしてワンピースが多いのは納得できる結果である。時代によりシルエットや丈の長さが変化する流行現象と照らし合わせながら、引き続き原氏のデザイン感性を分析したい。デザイン画に添付されている生地と記載されている生地名から、紬が多いことも特徴である。結城紬や紅花紬を用いてフォーマルなドレスではなく、街着として着装できるドレスを提案している傾向がみられた。